説教20211212イザヤ35：1-10マタイ11：2-11「荒れ野よ、喜び躍れ」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

「荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ　砂漠よ、喜び、花を咲かせよ」と最後まで、子供のように喜び歌いながら、人生を送る人は、間違いなく天の国に入ることが出来るでしょう。しかし、人間と言うのは長い人生の中で必ずつまずくもので、常に喜び躍っているわけには行きません。それでも、その悲しみの極みにある時でも、このイザヤによる預言を信じるならば、その人は又、信仰によって立ち上がらされ、天の国を求めて、喜んでその歩みを再開することでしょう。

信仰が弱められ、生きる喜びがなくなっていく、と言うことは誰にも起こることであります。それは洗礼者ヨハネにとっても例外ではありませんでした。又、この箇所を解き明かそうとする私にとっても例外ではありません。この聖書箇所を解き明かそうとすれば、ただ、この箇所に節をつけて讃美して喜んでいるだけではなく、この箇所を何度も何度も読んで黙想していかなければなりません。そのうちに、時にはつらくなってきて、「聖書にはこう書いてあるけど、本当にそうなるのか」などと信仰につまづきだすことも無きにしも非ずなのです。信仰が弱められると、一体、こんな非現実的なことが起こるのだろうかとか、こんなことを信じてもぬか喜びだなどと、一人で、頭で考えてしまいがちになります。このイザヤの預言が語る天の国の有様は、今私たちが歩む荒れ野のようなこの地上の有様とはずいぶん違います。それこそ天と地ほどの違いがあるわけです。そうして、私たちは頭で考えて、こんな非現実的なことなど起こりっこない、となってしまうわけですが、それこそ神様であるイエスさまにつまずいている証拠なのです。イエス様が奇跡をされないならば、そんなおかしなことはないのです。

さて、このイザヤの預言を読んでいて、ああいかにも天の国と言うのはこの地上とは違うなあと思わされるのですが、その最後の節にある「喜びと楽しみが彼らを迎え／嘆きと悲しみは逃げ去る。」という御言葉は、実は私たちはこの世にある時から心に留めて、体得しうることだと思います。

「喜びと楽しみが彼らを迎え／嘆きと悲しみは逃げ去る。」という聖句を聴いて思い出されるのは、詩編２３篇の「命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。」という有名な聖句であります。喜びや恵みが向こうの方からやってくる、と言うのは聖書が終始説くところであります。そんなのは当たり前ではないかと思われるかもしれませんが、実は私たちはこの世にあって、それと正反対のことをやっている場合が多いのではないでしょうか。私たちはこの世にあって、将来の幸福を自ら追い求めて頑張ってはいないでしょうか。聖書と違って、自分が喜びや恵みを追いかけてはいないでしょうか。そしてこれがこの世の常識であります。学校でこのことに異議を唱えたとしたら、頭がおかしいと思われるのではないでしょうか。このように天の国と地の国の常識は１８０度違うのですけれども、意外にその違いにクリスチャンでさえ気が付いていないのです。だから、平生、恵みのみだ～などといくら力んでも、少しもそれが身につかないということが起こってくるのでありましょう。

では以上の事を念頭に置いてマタイ福音書を観てまいりたいと思います。

ヨハネは牢の中、この牢は山の中の地下にある独房であったそうですが、その牢の中で打ちひしがれていました。それはそうでありましょう。牢に入る前は彼は多くの人から注目されて多くの人に洗礼を授けていたわけですから。ヨハネは将に偉大な人でありました。そして、人によっては、ヨハネとイエスとを同一視することもあったようで、或いはそんな人は多くいたのではないでしょうか。例えばヨハネの首をはねた領主ヘロデは、イエスのことを「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」と言っています。また、ヨハネとイエスは年がごく近い親戚であり、又、イエスはヨハネが牢に入れられた後、ヨハネと同じように「悔い改めよ、天の国は近づいた」と述べ伝え始めたのであります。このようにヨハネとイエスとが人々から同一視される諸条件はそろっていたのでした。いわばヨハネとイエスはそっくりさんであると人々から認識されてもおかしくなかった状況ですが、そんな中で、この聖書箇所は、イエスとヨハネの違いを歴然と証言し、記録しています。

ヨハネが牢の中で知りたかったのは、「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」と言うことでした。つまりイエスがまことの救い主であるかどうかでした。このようなことを問うヨハネの信仰は、牢の中で揺らいでいたと言わざるをえません。偉大な人ヨハネでさへこの様に信仰が揺らぎ弱められることがあるのです。その姿は私たち人間の率直な有様でありましょう。この時もし仮に、ヨハネが偽預言者のような俗物であったら、彼はイエスと似ている自分こそまことの救い主であるなどと言い出さないとも限らなかったでしょう。このようにこの聖書箇所は人間の置かれた危うい状況をとても正確に描写しています。それからヨハネは牢の中でイエスからその信仰を試されるのです。イエスはヨハネに告げ知らせます。「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」これはイザヤの預言のそのままを語っているわけですが、牢の中にいるヨハネが、これらの出来事を信じるか信じないかは、ただヨハネの信仰にかかっているのです。そしてイエスはヨハネに対し「わたしにつまずかない人は幸いである。」と釘を刺すのを忘れません。

私たちは今、何を信じたらよいのか分からない世の中を歩まされています。今の私たちはある意味、牢の中のヨハネのようなものです。私たちもイエス様が「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩く」ような奇跡をされたことを実際にこの目で目撃したわけではありません。ただ、私たちはこの出来事を、代代のクリスチャンの信仰を受け継いで、今それを信じるようにされているのです。そしてイエス様こそ奇跡をして下さり、救い主であるというこの信仰こそ、最も重要なことです。私たちはこのように見えないことを信仰していますが、聖書に書いてある通り、見えないことは永遠に存続するからです。

さて、このヨハネはイエス様ご自身が評されている通り偉大な人でした。群衆たちもみなヨハネを偉大な人だと思っていました。彼は決して風にそよぐ葦のような優柔不断な芯がない人物ではなく、又、王宮で、しなやかな服を着て、時の権力者に媚を売るような人物でもありませんでした。イエス様のヨハネに対する称賛の辞は、これ以上ないであろう程の絶賛であります。イエス様はヨハネを評して言います。「そうだ。言っておく。預言者以上の者である。『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの前に道を準備させよう』／と書いてあるのは、この人のことだ。」

イエス様は、なぜこれほどまでにヨハネのことを絶賛したのでしょうか。それは、やはり、ヨハネがイエスに先んじる使者としての役目を十二分に果たしたことへの賞賛であり、又ねぎらいの言葉でもあったのでしょう。確かに、ヨハネはこの後ヘロデに首をはねられ獄死してしまいます。彼自身は、荒れ野に花が咲き野ばらの花が一面に咲く姿を見ることが出来ずに死にました。それでも、このようにイエス様から絶賛され、偉大な者と呼ばれたのはヨハネにとって何物にも代えがたい喜びだったのではないでしょうか。

以上が、牢の中のヨハネとイエス様の関係の中で証しされたことですが、今日のマタイ福音書の最後の聖句「天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」は牢の中ではなくて、牢の外に出て、今の私たちにも向けて語られる、新しいイエス様の御言葉です。どう新しいのかと申しますと、私たちは洗礼者ヨハネが知らなかった、イエスキリストの十字架の死と復活の出来事を知っているということです。このように、今や、イエス様の十字架の死と復活と言う恵みを与えられている私たちはヨハネよりはるかに恵まれていると言えます。今や、私たちは偉大であることを目指す必要はなくなりました。確かにヨハネは偉大であったからこそ、イエス様から誉められ人々から尊敬されたのですが、イエス様の復活を知っている私たちは、自分が偉大であるとか、人から尊敬されているとかいうことを気にして、それを目指すという以上の道をイエス様から示されているのです。ではそのイエス様が示される道とはどういう道なのか。そのことをイエス様はわかりやすく端的に宣べられます。つまり「天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」と言うことです。

洗礼を受けた私たちは、この地上にあっても既に天の国の有様を予感し、「荒れ野よ、喜び躍れ」と賛美しながら歌い喜べるものとされています。これは将にイエス様が私たちのために死んでくださったことの恵みによります。私たちはイエス様に対し感謝と賛美をするばかりですが、この十字架にかかられて、私たちを救われたイエス様ご自身の姿を思い起こせば、私たちはますます小さなものであることの幸いを覚えないではいられないでしょう。イエス様は十字架上でこの世におけるもっとも小さな者、取るの足りない者とされました。そして小さなものでありながら、最も大きな救いの業を成し遂げられました。この十字架の出来事を覚える時、私たちがこの世で誇るような偉大さは、かえって救いの妨げ以外の何物でもないということに気づかされるでしょう。

私たちは、洗礼者ヨハネがイエス様から最も偉大な者だと褒められたことだけを聖書から取り出して、では自分もヨハネのように偉大で立派な信仰を持とうなどと言った間違った思いにとらわれる危険性を秘めています。私たちは、今一度、十字架上で私たちのために死んでくださった主イエスの小ささの方に目を注ぎ、その大いなる恵みを余すとこなく受け取って、喜び躍りつつ主イエスを待ち望んでまいりたいと願います。